

渡曾弘勝先生の「対話を通して仲間と学び合い、自分の考えを再構築することができる子の育成」について

名古屋学院大学 宇野民幸

渡曾先生は学級活動などの時間においてオリジナル種目で競い合う「わたリンピック」を開催しており、本実践研究について、～わたリンピック2018 第5学年算数科「平均とその利用」の実践を通して～という副題により報告をされている。特に、目ざす子ども像と仮説において、共に2本柱にして、主題にある「対話を通して学び合う」と、「考えを再構築する」ことを組み合わせ示されている。新学習指導要領においても求められる「対話的で深い学び」について、本実践の仮説について柱を分けて、さらに手立ても4段階にするという設定の工夫をすることにより、抽出児の変容という形で成果につながっていることが具体的に理解できる報告である。

協同学習や対話による学び合いにおいては、アクティブラーニングとして必要性は感じていても設定がし難い、また、手立てとしてもなおざりにされ易い「自分の考えを持つ」（個人追求）ことが、具体的に『わたリンピック2018』で開催される様々な種目により、どの児童にも持ちやすい視点と動機として得られていること、そこに協同性の素地（前提）が含まれていることがある（手立て①）。また、『立ち歩きトーク』では「自ら話す相手を選ぶ」ことより、対話に自然に入れることと、そこに主体性が含まれていること（手立て②）も、その特徴として挙げられる。さらに、『じっくりタイム』として、「思考を整理する」時間を、時限を隔てて設定することで、児童が考えを再構築することになり、抽出児の変容として確かな成果を得ている。また、これら一連の授業サイクルを単元に取り入れること（手立て④）は、各段階において、参加を足踏みする状態も児童によりある場合についても、いずれはこのサイクルに参加できるという要素があり、児童もそれが感じられることによる、学びの安心感が得られていることが多いと参考となる。

教材の内容については、「仮平均」の考え方や、よりよい使い方を、有用性として抽出児の変容により報告されているが、仮平均自体の利便性や「負の数」への意識など、数学的な考え方の整理において観点を広げる可能性などが、他の児童に対する効果としても期待できる。また、教材内容において今後さらに期待されることとして、2020年度より完全実施される学習指導要領により設定される領域「変化と関係」において、第5学年の学習内容となる「速さ」について、わたリンピックの『歩幅 de ぴったり賞対決』、『高速なわとび対決』により、ピッチ（回転数）とストライド（歩幅）の関係により、速さ（単位当たり量）の相互関係の理解が組み立てられことが考えられる。そして同じく設定される「データの活用」領域において、中学校の数学科より移行した内容「代表値の意味や求め方」、そして「目的に応じた統計的な問題解決の方法」についての実践研究とすでになっている報告である。新学習指導要領が実施される来年度に丁度開催される東京五輪・パラリンピックにちなんで、報告にみられた学級全体に培われている学習の意欲は、さらなる持続可能な学びのモデルとして、その先駆的な取り組みにも感じられるものである。